

道院だより

No.37

金剛禪総本山少林寺 埼玉北浦和道院

2011年 9月20日(火) 発行

文責 道院長 梶谷 憲 皇

合掌

共感しあえること、自他共楽の第一歩

前号でも紹介した、「さいたま市民体育大会 少林寺拳法大会」では、本当に良い成績を修めることができました。これは、道院長としては大変嬉しいことです。自分の日頃指導している拳士達が、公の場で、相応の評価を得たということですから。そして、なにより、拳士たちの喜ぶ顔を見られたことが一番でした。

大会終了後、道院の幹部拳士の天下井拳士が言っていました。

「今回、半田君と加茂君が最優秀になって、本当に嬉しかったです。」と。これには大変大きな意味が含まれています。実は、大会の1週間前から、道院の練習だけでなく、公民館を借りての自主練習会を行っていました。平日の練習では、なかなか練習に参加できない拳士がいますので、大会前に特別練習会を企画したのです。そこで、加茂拳士と半田拳士は練習することができました。その時に、つきっきりで、2人を指導してくれたのが、天下井拳士でした。仕事の忙しい合間を縫って来てくれて、指導に当たってくれていました。その二人が最優秀をとることができたのです。そして、そのことが、天下井拳士にとってとても嬉しいことだったのです。

以前、私が道院長になったばかりの時の大会での気持ちを、この「道院だより」で書いたことがあります。自分が大会に出るより、自分の道院の門下生が出ることの方が何倍も緊張したという内容のことです。また、同時に、よい結果が出れば、自分のことのようにうれしく思えました。もちろん今も同じです。自分の教えた門下生が、または、後輩が、良い結果を得て喜ぶ、これは、本当に嬉しいことです。また、逆に、結果が思わしくなく、悔しがっている姿を見るのは、本当に辛い。そんな思い、人を指導するという経験をしないと分かりません。後輩の喜びや悲しみ、悔しさを自分のものとして感じるができる先輩、仲間たち、この共感しあえる関係こそが自他共楽の第一歩なのだろうと思います。

青は藍より出でて、藍より青し。そして切磋琢磨。

“青は藍より出でて、藍より青し”という言葉があります。これは、青色は藍色から作られた色なのだけれど、本来の藍色よりもさらに青い、つまり、もともとのものを超えたという意味で使われます。私たち指導者は、その門下生や後輩たちに、常に自分を(指導者)を超えて行ってほしいと思っています。また、後輩達は、超えていかなければなりません。しかし、そう易々と超えられるような指導者では、指導者としての魅力はないし、その資格もないと思うからこそ、指導者である自分も、常に自分を磨き、精進することを怠ってはならないのだと思います。ただ、中には、大した努力もせず、権威や肩書だけをひけびらかし、威張っていたと考えている指導者もいるかもしれません。しかし、そのような人は、初めから指導者としては、その資質はない。そういう指導者の組織はいずれ廃れていってしまうのではないのでしょうか。少林寺拳法が今もこうして有り続けているというのは、先輩達が、自己の修練を心がけ、日々研鑽に励んでいるという証ではないかと思います。“人、人、人、すべては人の質にあり”です。少林寺拳法は、真に社会に貢献できる、本当のリーダーを育成することを目的としていますから、私達拳士一人一人が、常にリーダーとしての在り方を自らに問う姿勢を忘れてはいけません。

私たち修行者は、その道に踏み入れる時期により先輩後輩の順は必然としてできます。そこで大切なのは、後輩は、いつの日か先輩を超えるよう努力し、先輩も、後輩にはそう易々と超えられないように努力する、そういう自己の在り方です。これが切磋琢磨ということ。後輩は後輩としての自己を磨き、先輩は先輩としての自己を磨く、また、同期同志も、互いに、自らを磨きあうということ。そして、互いに努力しあいながら、より良いものを目指していく。これが、少林寺拳法の道の一つの在り方なのだと思います。

結手